

INTERVIEW：インタビュー

能楽師
重要無形文化財総合指定能楽保持者

鵜澤^{ひさ}久^ささん

圧倒的に男性が多い能楽の世界で、女性能楽師の道を切り開いてきた鵜澤久さん。2018年に師の名を冠した観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞したのに続き、2024年には伝統文化ポーラ賞優秀賞を受賞し、性別を超えた能舞台が高く評価されています。「私の生活のすべてが能楽」とおっしゃる鵜澤さんのこれまでの歩み、これからの行く先を聞きました。

聞き手・構成：保高 睦美

観世寿夫記念法政大学能楽賞 観世流の能役者、観世寿夫氏の業績を記念し、顕著な舞台成果を示した能役者等に贈られる賞。

伝統文化ポーラ賞 ポーラ伝統文化振興財団により、無形の伝統文化の分野に貢献した個人・団体に対し贈られる賞。



「私は男になりたい。 なぜならば、能楽師になれるから」

—— 能楽師の家に生まれた鵜澤さんが、能楽師を志したのは何歳ぐらいのことですか。

小学校5年生のときに学校で、将来何になりたいかという作文を書かされたんですけど、その時、「私は男になりたい。なぜならば、能楽師になれるから」って書いたら、先生が「男になんかなれるわけないでしょ」って。腹が立つというより、悲しいというか、私の気持ちを全然わかってない、分かってもらえないという気持ちになった。

父が能楽師（観世流^{てっせんかい}鉦仙会^{まさし}シテ方職分鵜澤雅氏）で、父が教えているお弟子さんたちの稽古を子歌のように聞いていました。私は、能楽が好きだし、やりたいし、でも、父には、女は能楽師になるものじゃないと言われて。自分が男だったら…という思いがあって。それを文章にしたことによって、能楽師になりたいという気持ちがはっきりしたんじゃないかと思います。

—— 大学は、東京芸術大学邦楽科に進まれていますね。

私が中学生のころ、父が、素人のお弟子さんの発表会に、芸大で能を学んでいる女性2人を呼んでいましたが、そのうちの一人は鉦仙会に入って玄人として舞台に出ていました。高校2年の時、芸大に行けば能の勉強ができるという思いで受験しようと決めました。

それまで父は、私に何か役が付いたときだけ教えてくれる感じでしたが、それが、芸大に行くことになったら、途端に非常に厳しく稽古してくれるようになった。本当にうれしかったです。私が玄人の能楽師になることを認めてたわけではなかったですが。

“世阿弥の再来” 観世寿夫に憧れて

—— そんな中、大学院に進学して院修了後はどうされたのですか。

そのころは、学生運動華やかかなりし時で、反体制的な立場で演劇界の旗手的存在だった^{ひさお}寿夫先生の舞台に学生がわんさか押しかけて、通路にまで観客が座るという時代で、あのむんむんとした熱気は、今では想

像できないでしょう。寿夫先生の能は、父のとも他の誰のとも違う、若者が惹きつけられてしまう魅力的な能だったんです。

私は、寿夫先生に稽古をしてほしくて、ほしくて。父は寿夫先生と同じ鍬仙会の能楽師なのに、女の私はそこに入れないというもどかしさでいっぱいでした。もう強行突破するしかないという気持ちで、毎週一回、鍬仙会で稽古能のある朝、父より早く家を出て南青山の鍬仙会の舞台に行って先に座っているんです。父より先に行ったのは、「来るな」と怒られるとわかっていました。そこに父が来て私をみると、一喝されるけど、帰れとは言わない、そういうことを何回も繰り返していました。

そうしたら、ある時、父が私の首根っこをつかんで、こっちに来いと。そして鍬仙会の当主だった七世観世鍬之丞先生てつのじょうの前に連れて行って、「今日からこの子を鍬仙会にいますからよろしくお願いします」と。それで鍬仙会に入らせていただくことになって、本当にうれしいというより、びっくりしました。

寿夫先生は「能というのは大変な伝統の世界だから、女の人的一生舞台に立てないかもしれないよ。捨て石になる覚悟があるならやりなさい」とおっしゃった。「一生舞台に立てない」「捨て石」なんて、ある意味衝撃的な言葉ですが、寿夫先生に稽古してもらえということしか私にはなかったから、未来の話なんかどうでもよかった。寿夫先生には、5年間珠玉の稽古を受けました。今、それが私の宝物です。

鍬仙会 観世鍬之丞家を中心とした演能団体

シテ 能の主役のこと。

観世寿夫 七世観世鍬之丞の長男。世阿弥の思想を体現し、戦後の能楽界の新しい動きの中心となる一方、現代音楽や演劇関係者と協力して広範な演劇活動を展開した。53歳で死去。

14年目の“初舞台”

——本当に舞台に立てなかったんですか？

そう。鍬仙会に入ったはいいいけど、当然、役は付かないし、楽屋の働き（裏方）だけやって。寿夫先生が何度もおっしゃっていた「シテから楽屋の人に至るま

でみんなで能の一曲を支えているんだ」という言葉、それから、小さいころから母によく言われた「誰に認められなくても、神様はどこかで見ていらっしゃるのよ、あなたのことを」という言葉に支えられたと思う。それとやっぱり能が好きなんです。だから我慢できたのかもしれない。

そうは言っても、後輩の男性能楽師がどんどん私を飛び越えて行くのにたまらなくなり、先輩たちに働きかけて、やっと年10回の定期公演に対して小規模な青山研究能の舞台に立てることになりました。それでも、女を認めない人はいて、なかなか番組（出演者等を記載したプログラム）を作ってくれないから、自分でチラシを作って地下鉄青山駅の入り口で配ったりもしました。ともかく、そういう風にして、観客のいる舞台にシテとして立つことができました。

24歳で鍬仙会に入ってから14年目。私は38歳になっていました。



女性初の 重要無形文化財総合指定保持者に

——それから着実に実績を重ねられ、女性能楽師の第一線にたってこられました。2004年、22人の女性能楽師が重要無形文化財総合指定保持者に指定され、鶴澤さんは最年少（57歳）でした。2007年から国立能楽堂では、不定期ですが女性能楽師による公演も開催されています。

第1回の公演に至るまでも、国立能楽堂の2階の研修舞台で、私も出て、男性能楽師と女性能楽師の比較みたいなことをして観客の反応を検証するという



ようなこともありました。演能後、司会者がお客さんに感想を求めると、一人の男性が手を挙げて、「女は能をやるべきじゃない」って言ったの。そうしたら、年配の凛とした感じの女性が「あなた、何

を言うのよ。能に男も女もないでしょう」って。その勢いがすごくて、満場の拍手。その後、新作能も書かれた演劇評論家の堂本正樹さんが男と女で何の違いもないとはっきり言ってくださいました。そんなことがあって、ようやく国立能楽堂で“女性能楽師による”というサブタイトル付きの公演が始まりました。

でも、それも3、4回やったところで、止めるらしいと聞いて、それまでに出演した女性能楽師の署名とハンコをもらって嘆願書を出したこともありました。その後も公演は、断続的ですが続いています。

社会的な価値観の変化にともなって、今、能楽界全体も少しずつ変わっていく兆しが見えています。能そのものが男女に関係なく発展していくことを信じています。

男も女もない能楽の道をひたむきに

—— 鶴澤さんは、難曲、大曲にも挑み続け高い評価を得て、受賞もされています。

ここは誤解されたくないんだけど、私は女性だけの能をやろうと思ってんじゃないじゃないですか。観世寿夫記念法政大学能楽賞の贈呈理由に「性別を超えた」という一文があり、さらにポーラ賞では、女の「お」の字もない授賞理由だった。それが一番の喜びでした。舞台上で人に感動を与える身体芸術としての能に男も女

もないのだという思い。そして、寿夫先生がよく言われていた「能は演劇なんだ！」という言葉の意味。それを私は死ぬまで追求していくのだと思っています。

—— 能楽師として、女性でよかったと思うことはありますか。

面白いと思うのは、ある曲を演じる時に男はこう捉えるかもしれないけど、女の私はそうは捉えないということがある。650年以上の伝統がある曲の本質は変わらないですが、演じる人の解釈や表現は変わってくると思います。稽古を重ねて曲の手掛かりをつかまえた時の感覚が、これは男ではわからないだろうなと思ったときに、私は女で得したなと感じます。

日本人皆に能を知ってほしい

—— 能は、何となく縁遠いものだと感じている人が多いかもしれません。

父が国立能楽堂で「^{あおいのうえ}葵上」という能をやった時に、当時小学校1年生だった娘の同級生2人が見に来て、騒ぐだろうから、客席じゃなくて楽屋から見えるところに連れて行ったんです。それが何と、一曲終わるまで3人で静かに一生懸命見てるんですよ。その後、お母さまが、2人の作文をくださったの。「女の人が焼きもちを妬いて鬼になった。怖くて夢にでできました」って。これでいいんですよ。この感想だけでいい。難しいことは何もいらぬ。子どもには能の言葉はわからないでしょう。だけど感性は優れているとその時思った。だから、子どものうちに見せることは大事だと気がきました。

葵上 源氏物語の「葵の巻」を題材とした能。シテは、光源氏の正妻葵上に激しい嫉妬の心をぶつける六条御息所の生霊

—— その思いで、1990年から毎年、川崎市の「こども能楽体験鑑賞教室」での活動を続けていらっしゃるのですね。

そうです。子どもたちへアプローチしたいという思いを川崎市文化財団の事務局長が汲んでくださり、夏休みの企画を立てることになりました。

バブルがはじけて一時、予算が3分の1になってしまったり、大変なこともありましたが、私の小学校の同級生で川崎市の小学校の教諭をやっている方が、ずっと手伝ってくれたりして、毎年90人募集で、お陰様でもう35回も続いています。昨年も満員でした。

——すごい。指導を受けた子どもたちは延べで3000人は超えますね。

その中から、稽古を続けたいという子たちに月1回の教室も開いていますが、塾や部活などでやめていて、大人になっても稽古を続けているのは2人だけ。なかなか難しいですね。



志をもって一心不乱に突き進む

——女性弁護士は弁護士全体の約20%ですが、女性能楽師も、能楽協会に所属する能楽師約1000人中、女性は約15%という報告があり、まだまだ少数派ですね。

今は、女性活躍が世の中の趨勢だけど、そうなればなるほど、水面下で否定する流れが強くなっている気がします。嫌なことですが、女を下に見たくてしょうがない人はいて、「お前の味方なんか一人もいないからな」と私に言う人もいます。

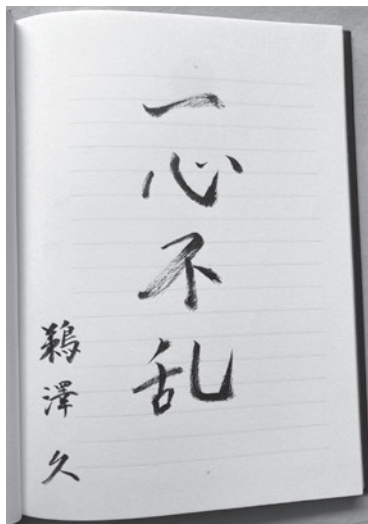
でもね、そこであきらめちゃダメなんです。押し続けていれば、分厚い壁もいつかは薄くなって網状になり、自分の目的とするところに必ずや到達できると信じています。自分の思いが強ければ突き進むことは可能だと思います。

——闘いは続くのですね。

私ね、バラのようにトゲトゲをいっぱい出していようと思うんです。何かのきっかけで、「女なんていらんだよ」って、「女」というくくりで、まとめて捨てられるかもしれない。そういう時にトゲトゲがあれば「イタイイタイ」って手を放される、そういう女になろうと思ってやってきました。

——^{きごう}揮毫をお願いします。

「^{たえま}當麻」という曲の「一心不乱（この部分、鶴澤さんは節をつけて謡う）」という語句と節が好きです。継母に疎まれた中将姫が一心不乱に極楽浄土を拝みたいと



願い、曼荼羅を織り上げたという^{たいま}當麻寺の縁起を題材とした能です。「一心不乱」は仏教の言葉で、現代的な用法とはちょっと違います。ただ夢中になるという意味ではない。一心不乱に心を尽くして物事を成し遂げるという意味合いです。

——心を一つにして、男も女もない能の道をひたむきに進む、鶴澤さんらしい揮毫だと感じます。

公演予定

銕仙会青山能「西行桜杖之舞」3月29日(日)12時、表参道・銕仙会能楽研修所。

この他、銕仙会定期公演「須磨源氏」(9月11日(金)午後6時、銀座・観世能楽堂)、川崎市定期能、第26回鶴澤久の会など。

プロフィール うざわ・ひさ

1949年東京都出身。東京芸術大学・同大学院修了。父、観世寿夫、八世観世銕之丞に師事。銕仙会所属、「鶴澤久の会」主宰。「卒塔婆小町」「桧垣」「嫉捨」等の大曲を抜き、舞台活動が続けるほか、新作能、現代劇にも意欲的に出演。海外の大学からの招へい公演等も行う。日本能楽会会員。川崎市文化賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、伝統文化ボーア賞優秀賞受賞。娘の鶴澤光氏も能楽師として活躍中。